

教養コース 文学講座

定員50人

小林一茶に学ぶ ― 俳句の作り方、味わい方 (全5回)

第4回 中年期の名句をまねる

第5回 老年期の名句をまねる

第4回 中年期の名句をまねる

日時 令和5年9月24日(日) 10:00~12:00

場所 みずほ台コミュニティセンター

講師 谷地快一先生 東洋大学名誉教授

参加者 22名

内容

冒頭で、前回回収した参加者の俳句について「十七拍にしよう。お似合いの言葉を探そうという意識が顕著になった」というお褒めのことばがあった。そして、次のステップとして「自分にとって、なるべく大切なもの、大切なことを詠もう」という助言があり、あらためて短冊が配られた。

さて、第四回目の今日は「一茶が遺産相続で再三帰郷したり、下総、房総の行脚が続いている中年期の俳句」に学ぶこと。以下はその講話の抄出である。

「古郷や餅につき込む春の雪」は「春の雪」を「つき込む」と言っているから、年末のそれではなく、何かの祝い事の餅つき。餅と雪とに共通する「白」は信州育ちの一茶ならではの喜びの表現である。

この時代は祖母や亡父の法事のたびに帰郷し、遺産分配の交渉をするが何度も不調が続き、菩提寺の住職の調停で決着して家屋敷も折半となるのは五十歳を過ぎてから。その間の

心境は継母や異母弟の敵意に満ちた態度を詠んだ「古郷やよるもさはるも茨の花」「雪の日や古郷人のぶあしらひ」「心から信濃の雪に降られけり」などに明らかで、やっと手にいれた家屋さえ、「名月のご覧の通り屑屋かな」「これがまあ終の栖か雪五尺」と自嘲するばかりであった。そんな中で渡り鳥に「今日からは日本の雁ぞ楽に寝よ」と自己投影する句があるのは救われる。

次に老年期の名句に言及する。帰住を果たした一茶は五十二歳で母方の遠縁にあたる菊と結婚。天命を知る歳で妻を迎える喜びを「五十聳天窓（あたま）をかくす扇かな」と照れてみせた。薄くなった老年の頭を恥じているのである。五十四歳の時に長男千太郎が生まれるが一ヶ月弱で没。俳諧では江戸・房総・上総・下総・安房・常陸を精力的に歩いた時期にあたる。

その他、雪国の春の到来を喜ぶ「雪解けて村いつぱいの子どもかな」、メスを複数のオスが争う蛙の恋に「痩せ蛙まけるな一茶これにあり」と応援するのもこの時代。生きるために殺生を避けられない矛盾を「蠅一つ打つては南無阿弥陀仏かな」と詠み、家を手に入れてもなお癒やされない孤独を「大の字に寝て涼しさよ淋しさよ」とつぶやいたりもした。

以上、予定した老年期の名句の解説を終え、聴講者が作った俳句短冊を回収して終了した。



第5回 老年期の名句をまねる

日時 令和5年10月1日(日) 10:00~12:00

場所 みずほ台コミュニティセンター

講師 谷地快一先生 東洋大学名誉教授

参加者 22名

内容

最終回の今日は、〈俳句は「十七音か」、それとも「十七拍」か〉という質問への回答から。俳人の多くは慣例で「俳句は十七音」と説くが、韻律上は「俳句は十七拍」が正しい。一例を示せば、「学校に傘を忘れて秋の雨」という句の「学校」は2音(ガッ/コウ)で、4拍(ガ/ツ/コ/ウ)。つまり音(シラブル)で数えると「三・七・五」と2拍不足し、拍(モーラ)で数えて初めて「五・七・五」となる。拗音(キャ・シュ・チョ・クワ)や捨て仮名(ハッ橋・四ッ谷)などは一拍という例外もあるが、基本的には仮名文字ひとつを一拍と数えて、十七拍に整えてください。



次に、前回提出された参加者の俳句の講評を少し。全体的には一人で複数句を提出する人が増え、「十七拍」にまとまる句も増えた。日本語は平仮名より漢字の方が分かりやすい場合がある。但し、振り仮名を振らないで済む一般的な漢字を使ってほしいというアドバイスあり。季語の重複を避け、易しい漢字の使用などを心がけるともっとよくなるだろう。この機会を逃さず、ゆるやかな寄り合い(俳句会)を作って、スローライフ(心豊かな暮らし)を楽しんでいただきたい。

では、小林一茶老年期(其の一)の俳句の解説を続ける。

「あの月をとってくれろと泣く子かな」はどんな子で、どこにいるのか。親の背中か、ひもじい乞食の子か。鑑賞は自由ゆえ、自分の人生と重ねてみてほしい。

雪が大切なテーマだった一茶に「むまそうな雪がふうはりふはりかな」という句がある。

「ふうはりふはり」とあるから春先の雪か。一茶にとって、時に人情の冷たさ、貧しさを象徴してきた雪だが、それは汚れのない美しさ、食べてみたくなる存在でもあった。



老年期(其の二)の代表句に移る。

五十代に入って、頭の毛も薄くなった歳で結婚した一茶は、照れながらも、喜びを隠さぬ日々を送ったが、その幸せは長くは続かなかった。相次ぐ子どもや妻の死。後妻に迎えた嫁との離縁。その後に再婚を果たすも、大火で家を失って、地元門人宅を転々とする。

「這へ笑へ二つになるぞ今朝からは」は長女さとが数え年二歳を迎えた新年の喜び。「蚤の跡かぞへながらに添乳かな」は長女に乳を与える妻のスケッチ。「露の世は露の世ながらさりながら」はその長女が痲瘡で亡くなった際の嘆息。これらは何の説明も要らない絶唱とあってよいだろう。

お世辞にも恵まれた人生とは言えなかった一茶だが、最晩年の平安を思わせる二句を紹介して結びとしよう。一つは「湯に入りて我が身となるや年の暮」、もう一つは「ともかくもあなた任せの年の暮」である。

前者は多事多難な一年が終わろうとする歳末の入浴。ようやく自分の身体が自分の戻ってくる気がすると言っている。

後者の「あなた」は浄土信仰における阿弥陀如来。変転きわまりない生涯であったが、「さあ、そろそろ我が命をあなたにお任せする年の暮ですよ」と言って、年越しの苦勞を他力信仰によって乗り越えようとしているのである。

報告 出井あや子